

教養に裏打ちされた豊かな国際感覚

正田 英三郎

故大平首相は一九八〇年六月の総選挙のとき、自民党の総裁として身を挺して陣頭指揮をされ、中途、疲労のためといわれて入院された。その後の経過も順調で、最後まで、サミットの会議にも出席するつもりで準備しておられるように伝えられていたので、よもや容態が急変して、あのようなことになるうとは思いもおよばなかった。わが国はもとより、大平さんを知る世界各国の人がその死を惜しみ、心から弔意を表した。

故人が読書家であることは、帰宅の途中などに、書店にたちよられることが新聞にもでていたのでよく知られているが、同時に、ゆたかな国際感覚を身につけた人であったことは、亡くなられてからのいろいろな報道で知った人が、意外に多いようである。

しかし、大平さんが海外で声望の高いことは一部の人の間ではよく知られていたことである。そして、それは決して偶然のものではなく、遠くよってきたるところがあったように思われる。

大平さんは東京商科大学に学んだが、ゼミナールの指導教授には、上田辰之助先生をえらばれた。上田先生は英、独、仏はもとよりスペイン語、イタリア語、中国語にまで通じ、経済学者であるとともにすぐれた言語学者であり、社会学者であった。トーマス・アクィナスを原典で勉強された話は有名で、ことばの天才といわれた人で、読書の幅も広く、故人はこの先生からヨーロッパ思想というものをその源流から学ばれたのだと思う。また、上田先生はことばに対して非常に厳格な人で、大平さんが発言する前にことばの選択に慎重であったことはしら

れているが、これも上田先生の影響によるものであろう。

もう一つは津島寿一さんとの結びつきである。大平さんは郷里の先輩の津島さんのすすめで大蔵省に入られたそうである。その後、津島さんが小磯内閣に大蔵大臣として入閣されたときは秘書官となり、東久邇宮内閣が成立したとき、津島さんが再び大蔵大臣になると大平さんもまた秘書官に就任した。

津島さんは戦前、大蔵省の海外駐劄財務官として長く英米に勤務され、海外からの信頼も厚く、その盛名は内外になりわたり、数すくない日本の代表的国際人であった。

外国の人々からも尊敬された大平さんの知性というものは、若くしてこの著名な国際人の知遇を受け、また、後に二度にわたってそば近く仕えたときに、しらすしらすのうちに学びとり身につけたもので、決して一朝一夕の間に形成されたものではない。

大平さんは、平生はきわめて多忙なため、休みのときは気分転換のため、よくゴルフをされたようである。私も何回か一緒に一緒にしたことがある。大変個性的なフォームでプレイされるが、スコアの方はあがってみると、なんとかうまくまとめられている。ご自身でも、自分のゴルフは焼酎みたいなゴルフで、まずいけれど強いゴルフだといっておられたことがある。政治の手法にもなにか通ずるものがあるように思われた。

大平さんが中途、病のためたおれられたことはさぞ心残りのことであつただろうが、総選挙があのような成果を収め、政局の安定をみたことは、なんといいても近來の偉業で、もって瞑せらるべきであらう。